

日本語学校外国人留学生の広島大学志望形成にかかわる研究

——国際的大学環境と入試広報効果に着目して——

三好 登, 杉原 敏彦, 永田 純一 (広島大学)

日本人18歳人口の減少により, 政府は2020年までに留学生30万人の受け入れを目指している。このため, SGU採択校を中心に, 英語で学位取得可能な学部の設立などの国際的大学環境の充実及び, 外国人留学生の積極的な受け入れのための大学説明会など入試広報を行っている。このことから本研究では, 日本語学校外国人留学生の広島大学への志望形成に寄与している要因を明らかにする。

分析結果から, 文系学部では「外国人教員・留学生の量的拡大」「国際的な大学設備・学生支援環境の質的充実」が, 理系学部においては「英語による大学教育環境の質的拡大」の効果がそれぞれ明らかとなった。また全ての学部で「直接型入試広報」「間接型入試広報」の効果が確認された。

キーワード: 日本語学校, 留学生, 進学アスピレーション, 国際的大学環境, 入試広報

1 研究背景と目的

2019年現在, 日本人18歳人口は約120万人となっているが, 2030年には約100万人にまで減少することが見込まれている。このため, 政府は2008年に「留学生30万人計画」を提唱し, 2020年までに留学生30万人の受け入れを目指している。また文部科学省が2014年に「スーパーグローバル大学創成支援事業(以下, SGUと呼ぶ)」¹⁾の公募を行い, 採択校において英語で学位取得可能な学部の設立や, 英語による授業科目の増加などの国際化成果指標として国際的大学環境の充実及び, 外国人留学生²⁾の積極的な受け入れのための入試広報が推進されている。

本研究で対象とする広島大学は, SGU採択校で, 2018年に英語で学位取得可能な総合科学部国際共創学科(IGS)を設立し, 現在, そのほかの学部においても英語プログラムの整備を進めている。これに伴い, これらの学部(IGS除く)の大半の学生は現在, 日本人学生であるが, 今後は外国人留学生の受け入れも増やしていくことが想定される。現状における広島大学への外国人留学生の志望ルートとしては, 日本語学校経由者が最も多くなっており(IGS除く), 例年, 12学部の私費外国人留学生入試において約60名前後³⁾の志願者がいる状況となっている(IGS含まず)。

以上の研究背景から, 本研究では日本語学校外国人留学生の広島大学への志望形成に寄与している要因について明らかにすることを目的とする。なお本研究では広島大学を対象としているが, 多くの大学の私費外国人留学生入試では, 渡日しての受験を課しているため, 広島大学と同様に, 日本語学校経由者が多いと考えられる。よって本研究の課題を明らかにす

ることは, 広島大学のみならず, そのほかの多くの大学における私費外国人留学生の学生募集を行う上においても極めて有用であると考えられる。

2 先行研究と課題の設定

2.1 先行研究

これまでの日本語学校外国人留学生の大学志望形成にかかわる研究としては, 岡・深田(1995), 浅野(1997), 久村(2002), 山田(2010)や, 張(2012a, 2012b)があり, その多くは「進路プロセス」について焦点が当てられてきたという特徴がある。

日本語学校の中国人留学生を対象とした岡・深田(1995)の研究では, 経済的問題や心理的問題を抱えながらも, 日本語学校卒業後は, 日本の大学及び専門学校に進学したいという強い意志があることが示されている。また同様に, 日本語学校の中国人留学生を対象にインタビューを行った浅野(1997)は, 中国で高校を卒業した日本語学校留学生の関心は, 大学進学やそれに向けた日本語学習に収斂していることを明らかにしている。そして渡日直後の日本語学校の中国人留学生にインタビューを実施した久村(2002, pp. 119-128)の研究では, 「第一希望は4年制大学, 次は専門学校, それでもダメなら日本留学経験をテコに, 帰国して就職」といったように, 渡日してきた時点から明確であることが解明されている。さらに山田(2010)の研究において, 大学を受験する場合には, 一大学のみを受験しており, 複数の大学を受験しないという傾向にあることがわかっている。ただこれらの先行研究では, 留学生を一律に捉えすぎているとし,

表1 インタビュー対象者プロフィール

	性別	年齢	出身国/地域	志望大学	志望学部
Aさん	女性	18歳	中国	広島大学	経済学部
Bさん	男性	19歳	中国	広島大学	工学部
Cさん	男性	19歳	中国	そのほか大学	工学部
Dさん	女性	18歳	中国	そのほか大学	教育学部

渡日前の学歴をもとに留学生を類型化した張（2012a, 2012b）の研究では、高卒大学未受験タイプは、それ以外のタイプと比べて、日本の大学に順調に進学していることが明らかにされている。

2.2 課題の設定

これまでの研究では、日本語学校外国人留学生は、渡日当初から大学を志望しており、高卒大学未受験タイプほど、大学に順調に進学する傾向にあるという「進路プロセス」まで明らかになっている。しかし、日本語学校外国人留学生の大学志望形成に寄与する「規定要因」は明確になっていない。現状その一つとしてSGU採択校を中心に各大学は外国人留学生の入学を促すため、外国人専任教員等の増員や、外国人留学生の学生支援体制の充実などといった国際的の大学環境の充実が行われている⁴⁾。また海外での大学説明会の開催、大学案内パンフレットや、ホームページの充実という入試広報も行っている。

本研究ではこれら国際的の大学環境と入試広報の効果に着目して検証を試みるが、文系学部/理系学部といった学部における専門分野の特性によって、国際的の大学環境の効果は異なると思われる。文系学部では座学が中心で、様々な授業科目から留学生自身で履修する授業科目を決めていく必要があり、その授業の課題も寮・下宿先などにおいて自身で進めていくことが求められるため、留学生の境遇を理解し得る外国人教員及び留学生の有無や、国際的な大学設備・学生支援環境によって、志望形成をしていると考えられる。その一方で、理系学部では授業で使う教科書は英語で書かれたものが指定され、研究室に配属となれば英語で書かれた学術論文を読む機会が多いと考えられることから、英語による大学教育環境の有無によって、志望形成が行われていることが想定される（仮説1）。

次に入試広報に関しては、全学部で、その効果がいずれも認められると考えられるが、留学生の場合は言語面から大学ホームページや大学案内からのみでは理解が困難なことが多いことが想定されるため、直

接質問することができる大学説明会での効果によって、より志望形成が行われていると考えられる（仮説2）。

3 理論枠組み

これまでの外国人留学生の海外大学進学に関する研究では、Lulat & Altbach（1985）のPush-Pullモデルの理論枠組みに基づいて進められてきた。本研究では、それを発展させ、送出国のPush要因に加え、受入国のPull要因について、「国レベル」でのPull/macro、「大学レベル」でのPull/microに分けて検討を試みる。そして本研究において、このことを分析するに当たり、日本人学生の大学志望形成にかかわる研究（中澤・藤原、2015など）を参考に、Push要因として5.1で本人の社会・経済的状況、5.2で学習状況、これに加えて本研究で着目するPull/macro要因及び、Pull/micro要因に関して5.3で希望国・選択理由・志望大学、5.4で志望大学選択理由とした上で、5.5で規定要因分析を行い、検証を試みる。

4 研究方法

2018年8月～11月にかけて、近畿地方、中国・四国地方及び九州地方の日本語学校に通う外国人留学生を対象に実施した広島大学説明会において、780名にアンケートを配布し、その場で記入してもらい、652名⁵⁾から回収した。回収率は83%であった。

またそのアンケート調査に協力いただいた652名で、任意で電子メールアドレスの記入をいただいた39名に、インタビュー調査の協力を依頼した。その結果、4名から協力を得て、2018年12月に、Skypeでそれぞれ約1時間に渡ってインタビューを行った。インタビューは、半構造化形式にて実施した。インタビュー対象者プロフィールは、表1の通りである。

5 分析結果と考察

5.1 本人の社会・経済的状況との関係

本節では、本人の社会・経済的状況（性別、出身国・

地域、家庭の経済状況)と広島大学志望者(321名)との関係について検証を行う。まず性別(「あなたの性別はどれですか」と尋ねた上で、「1. 男性」「2 女性」で回答を求めている)についてであるが、女性(60.5% < 194 名 >)の方が、男性(39.5% < 127 名 >)と比較して、広島大学志望者が多いことが確認できた。これを学部別にみると、学部によって状況が大きく異なり、特に経済学部で女性(73.9% < 38 名 >)の方が多い傾向が顕著である一方で、工学部においては反対に男性(91.3% < 67 名 >)の方が多いことがわかった。ただしこの傾向については、外国人留学生に限定したことでなく、日本人学生においても少なからず同様のことが言える。

次に出身国・地域(「あなたの出身国・地域はどれですか」と尋ねた上で、「1. 中国出身」「2. 中国以外出身」で回答を求めた)についてであるが、中国出身(84.9% < 273 名 >)が、中国以外出身(15.1% < 48 名 >)と比べて、広島大学志望者が多いことが確認できた。これを学部別にみると、学部を横断して中国出身が極めて多い状況となっており、学部による違いはみられなかった。

また家庭の経済状況(「あなたの家庭の経済状況はどれですか」と尋ねた上で、「1. 豊かではない」～「4. 豊か」の4段階で回答を求めた)についてであるが、「やや豊か」な学生層(59.2% < 190 名 >)が、「豊か(22.3% < 72 名 >)」「やや豊かではない(11.3% < 36 名 >)」「豊かではない(7.2% < 23 名 >)」という学生層と比較して、広島大学志望者に多いことがわかった。これを学部別にみると、この傾向に学部による違いはみられないことがわかった。学部による差が少ないのは、広島大学は国立大学であることから、授業料が安価で、学部によって一律であることがこの背景の一つとしてあるように思われる。

5.2 渡日前の学習状況との関係

本節においては、渡日前の学習状況と広島大学志望者との関連性に関して検討を行うこととする。

まず高校の学業成績(「あなたの高校での学業成績はどれですか」と尋ねた上で、「1. 劣っていた」～「4. 優れていた」の4段階で回答を求めた)に関してみると、「やや優れていた(60.3% < 194 名 >)」学生層が、「優れていた(11.3% < 36 名 >)」「やや劣っていた(20.5% < 66 名 >)」「劣っていた(7.9% < 25 名 >)」学生層と比べて、広島大学志望者に多いことが確認できた。これを学部別にみると、特に理学部及び工学部で、「やや優れていた(69.8% < 57 名 >・

68.9% < 50 名 >)」学生層が顕著な傾向にあることがわかった。

次に日本語能力試験スコア(「あなたの日本語能力試験のスコアはどれですか」と尋ねた上で、「1. N5」～「5. N1」の5段階で回答を求めた)に関してであるが、N2(49.9% < 160 名 >)、N1(18.9% < 61 名 >)、N3(18.4% < 59 名 >)の順で、広島大学志望者に多いことが明らかとなった。これを学部別にみても、すべての学部で同様の傾向がみられることが確認できた。広島大学の私費外国人留学生入試では、どの学部においても日本語能力試験スコアの提出は求めている。だがセンター試験や、面接は日本語で行われ、必然的に日本語能力は必須となることから、日本語能力試験で高いスコアを取得していることが志望の前提条件になっていると考えられる。

5.3 渡日前の希望国・選択理由・志望大学との関係

本節では、渡日前の渡航希望国・日本選択理由・志望大学の有無と広島大学志望者との関係を検討する。

まず渡航希望国(「あなたは渡日前、渡航希望国はどれでしたか」と質問した上で、「1. 日本」「2. 日本以外」の2段階で回答を求めた)についてであるが、日本(84.5% < 271 名 >)、日本以外(15.5% < 50 名 >)となっており、広島大学志望者は当初から渡日を希望していた者が大半であることがわかった。これを学部別にみると、全学部を通じて、日本を渡航希望国とするものが最も多いことがわかった。

次にその日本選択理由(「あなたは渡日前、留学先として日本を選択した理由はどれですか<複数回答>」と回答を求めた)について、送り出し国の Push 要因及び、受入国としての日本の Pull/macro 要因に分けて検討した。まず Push 要因についてであるが、母国の大学への進学競争が厳しく進学が難しかったため(68.2% < 219 名 >)、母国の高校での先生や両親の勧めがあったため(63.4% < 204 名 >)、母国の大学教育の質が低かったため(61.1% < 196 名 >)の順で、広島大学志望者に多いことが明らかとなった。これを学部別にみても、学部によって順番は異なるものの、その傾向は同様であることが確認できた。中国における大学入試は、「普通高等学校招生全国统一考试(高考)」と呼ばれ、日本のセンター試験の受験者が約 50 万人であるのに対して、約 950 万人であり、入学定員も少ないことから、受験競争が激しいということが背景の一つとしてあるように考えられる。このこともあり、高校の先生や両親が子供を渡日させ、進

学させることも視野に入れて検討していると思われる。

また Pull/macro 要因に関しては、日本が経済や技術が発達した国であったため (64.8% < 208 名>), 日本の大学教育の質が高かったため (61.8% < 198 名>), 日本でのアルバイト時間が長かったため (60.1% < 193 名>) の順で、広島大学志望者が多いことが確認できた。これを学部別にみると、すべての学部において順番は違うものの、その傾向は同じであることが明らかとなった。国民総生産 (GDP) でみれば、中国の方が、日本と比較し、高い水準にあるが、中国は省によって格差が大きい⁶⁾、そのような印象を日本に対して持ち、志望してきている可能性がある。また日本では外国人留学生に対して原則、資格外活動として週 28 時間のアルバイトを認めているが、これは諸外国⁷⁾と比べて、長くなっていることが背景としてあるように考えられる。

そして志望大学の有無 (「あなたは渡日前、志望大学は決まっていたか」と尋ねた上で、「1. 決まっている」「2. まだ決まっていない」の 2 段階で回答してもらった) であるが、「まだ決まっていない (79.3% < 255 名>)」方が、「決まっている (20.7% < 66 名>)」と比較して、広島大学志願者に多いことがわかった。これを学部別にみても、傾向は同じであることが明らかとなった。このことから、まずは渡日して、日本語学校に入り、そこで色々な大学の入試情報を収集し、在学中に大学を決定していることがわかる。

5.4 渡日後の志望大学選択理由との関係

本節では、本研究において着目する渡日後の志望大学選択理由と広島大学志望者との関係について、5.4.1 ではアンケート調査から、5.4.2 ではインタビュー調査からそれぞれ明らかにする。

5.4.1 アンケート調査から

志望大学選択理由 (国際的⁸⁾大学環境⁸⁾ (「あなたは渡日後、志望大学を選択した理由はどれでしたか <複数回答>」) と回答を求めた) との分析結果から、Pull/micro 要因 (国際的⁸⁾大学環境) については、外国人留学生の割合が多かったため (69.8% < 224 名>), 外国人教員の割合が多かったため (61.3% < 197 名>) といった言わば「外国人教員・留学生の量的拡大」、日本人学生と外国人留学生の混在型宿舍が充実していたため (63.9% < 205 名>), 外国人留学生の学生支援体制が充実していたため (63.9% < 205 名>) という「国際的な大学設備・学生支援

環境の質的充実」の順で、広島大学志望者に多い一方で、英語のみで卒業できるコースがあったため (30.2% < 97 名>), 英語による授業科目が多かったため (30.2% < 97 名>), 英語によるシラバスがあったため (29.8% < 96 名>) といった「英語による大学教育環境の質的拡充」が少なくなっていることが明らかとなった。だがこれを学部別にみると、学部によって大きな違いがみられ、経済学部 (前述の順番同様に記載: 67.2% < 34 名>・60.2% < 31 名>・63.7% < 32 名>・63.7% < 32 名>), 法学部 (66.9% < 33 名>・60.1% < 29 名>・62.9% < 31 名>・62.1% < 30 名>), 総合科学部 (70.3% < 27 名>・65.2% < 25 名>・65.2% < 25 名>・65.2% < 25 名>), 文学部 (69.2% < 13 名>・60% < 11 名>・63.5% < 12 名>・63.5% < 12 名>) という文系学部については「外国人教員・留学生の量的拡大」及び、「国際的な大学設備・学生支援環境の質的充実」が広島大学志願者に多い一方で、理学部 (前述の順番同様に記載: 50.2% < 41 名>・50.2% < 41 名>・50.1% < 40 名>), 工学部 (53.9% < 39 名>・56.2% < 41 名>・57.2% < 42 名>), 生物生産学部 (52.4% < 5 名>・52.4% < 5 名>・55.5% < 6 名>) といった理系学部では「英語による大学教育環境の質的拡大」が多いというように、違いがあることが明らかとなった。

広島大学は SGU 採択校であるため、英語による大学教育環境の質的拡充を行い、外国人留学生の受入れを促進させることは重要なミッションであるが、広島大学の現状として、私費外国人留学生入試を志願する学生の大半は、日本語学校の留学生である。日本語学校は、日本語の学習を主な目的として来日し、滞在する外国人を対象に日本語教育を行う教育機関である。したがって、大学側で、英語による大学教育環境の質的拡充をいくら進めても、日本語を学習してくる志願者との間にミスマッチが生じているという状況があるように考えられる。だが理系学部では、その専門分野の特性から、日本語学校の志願者でもある程度の英語能力の素養が求められることから、英語による大学教育環境の質的拡充が重要となっていると考えられる。

次に Pull/micro 要因 (入試広報⁹⁾) (「あなたは渡日後、志望大学を選択した理由はどれでしたか <複数回答>」) と回答を求めた) に関してであるが、広島大学説明会や相談会に参加したため (65.3% < 210 名>) といった「直接型入試広報」、広島大学案内やパンフレットをみたため (55.3% < 178 名>), 広島

大学のホームページをみたため（52.3% < 168 名 >）という「間接型入試広報」の順で、広島大学志望者に多いことが明らかとなった。これを学部別にみても、すべての学部において、同様の傾向にあることが確認できた。

5.4.2 インタビュー調査から

このことについて、本研究では広島大学志望者 2 名、広島大学以外志望者 2 名に、以下の通り、それぞれインタビューを行った。まずは広島大学志望者に対するインタビューからみていくこととする。

(A さん) 広島大学は国立大学の中において、中国からの教員・留学生が多く、留学生が多いことからその学生寮やサポート体制も充実していると考えたため、入りたと思いました。英語での授業やシラバスがあるかどうかということは、今、日本語学校で日本語を学んでいますし、文系の学部を志望しているため、私にとってはそんなに重要な要素ではないです。広島大学のことは、パワーポイントを使い、説明していただき、質問も直接することができるので、ホームページや大学案内をみているよりも、良いかと思いました。

(B さん) 今、日本語学校に通っていますが、英語の方が得意ですし、将来的にエンジニアになりたいので、英語の授業やシラバスがあることから、広島大学に入りたと思いました。広島大学の説明会について、来てくれる大学がほとんどない中で、説明してくれて良かったです。ホームページや大学案内は、日本語版の方は詳しく書かれており、英語版だと情報が限定されているということから、大学説明会では分からないことを直接尋ねることができるので助かりました。

広島大学志望者に対するインタビューから、経済学部という文系学部では SGU の取り組みの中でも外国人教員・留学生の量的拡大や、国際的な大学設備・学生支援環境の質的充実が求められている一方で、工学部といった理系学部では英語による大学教育環境の質的拡大によって志望していることがわかった。このことは、SGU による国際化は大学全体で取り組

んではいるものの、実際にはその対応は学部によって変えていかなければいけないことを物語っている。

また入試広報については、日本語学校を訪問し、説明会を実施する大学が少ない中で、パワーポイントを使用して説明し、大学のことについて質問できるという機会が、学部を通じて、広島大学に志望するかどうかを左右していることがわかった。ホームページや大学案内も重要ではあるものの、日本語版と英語版とでは内容が異なっているということに加え、留学生にとっては日本語版であったとしても言語の問題があるため、より丁寧な対応が必要であることもわかった。

ここまで広島大学志望者に対するインタビューについてみてきたが、これと比べて、次に広島大学以外志望者に対するインタビューをみていくこととする。

(C さん) 本当は広島大学に入りたいですが、学部における私費外国人留学生入試の定員枠が少なく、留学生が多いと言っても大部分は大学院生であることから、関西にある私立大学を志望することにしました。その私立大学は、各学部で 10 名前後の定員枠があり、試験は日本留学試験 (EJU) のみです。今、日本語を学んでいます、エンジニアになりたいので、英語での授業があるかどうか重要な要素でした。

(D さん) はじめは広島大学を考えましたが、私費外国人留学生入試の試験で、センター試験、個別試験、日本留学試験 (EJU)、英語外部試験、面接を課していて、どれも日本語での受験のため、難しいと思い、あきらめました。東京にある私立大学に入ろうと考えていますが、そこは日本で留学生の受け入れ人数が最も多く、中国の有名な政治家の留学先の大学であったため、中国人の間で人気が高いです。私は文系学部に入ろうと思うので、英語の授業やシラバスが充実しているかということは重要ではありませんでしたが、留学生の寮はもちろんのこと、留学生それぞれに対して教員及び、学生チューターがつき、学習生活のサポートを行うという制度があるので、これに魅力を感じて志望した。

D さんの語りからわかるように、その私立大学にお

表2 広島大学志望者に関するロジスティック回帰分析

独立変数	全体	総合科学部	経済学部	法学部	文学部	理学部	工学部	生物生産学部
	オッズ比 (θ)							
<本人の社会経済的状況>								
女性ダミー (基準値: 男性ダミー)	1.02 **	1.01	1.01 **	1.03	1.02	0.44	0.59 **	0.34
中国出身ダミー (基準値: 中国以外出身ダミー)	1.15 **	1.18 **	1.16 **	1.17 **	1.15 **	1.17 **	1.16 **	1.15 **
家庭の経済状況	1.11 **	1.11 **	1.12 **	1.10 **	1.13 **	1.15 **	1.13 **	1.14 **
<渡航前の学習状況>								
高校の学業成績	1.03 **	1.01	1.02	1.04	1.01	1.03 **	1.04 **	1.04
日本語能力試験スコア	1.14 *	1.14 *	1.15 **	1.17 **	0.15 **	0.14 **	0.12 *	0.11 *
日本渡航希望ダミー (基準値: 日本以外渡航希望ダミー)	1.16 **	1.18 **	1.15 **	1.17 **	1.16 *	0.15 **	0.14 **	0.14 **
志望大学決定ダミー (基準値: 非志望大学決定ダミー)	0.32 *	0.22 *	0.19 *	0.15 **	0.14 *	0.13 **	0.11 *	0.09 *
<Push要因>								
母国の大学への進学競争が厳しく進学が難しかったため	1.11 **	1.09 **	0.11 *	0.13 *	1.08 **	1.14 *	1.15 *	1.14 *
母国の高校での先生や両親の勧めがあったため	1.13 *	1.12 *	1.13 *	1.11 *	1.14 **	1.09 *	1.08 **	1.11 *
母国の大学教育の質が低かったため	1.09 **	1.09 **	1.08 **	1.09 **	1.05 **	1.11 *	1.13 *	1.12 **
母国と文化的類似性や地理的距離の近さがあったため	1.04	1.03	1.05	1.01	1.02	1.06	1.02	1.04
母国の大学を出ても条件の良い就職を得ることが困難であった	1.03	1.04	1.06	1.04	1.03	1.08	1.05	1.07
母国で奨学金がもらえたため	0.59	0.21	0.24	0.19	0.15	0.33	0.29	0.25
母国の大学進学に失敗したため	0.44	0.33	0.31	0.35	0.11	0.24	0.28	0.21
<Pull/macro要因>								
日本が経済や技術が発達した国であったため	1.09 *	1.05 **	1.08 *	1.07 **	1.04 *	1.11 *	1.13 *	1.12 *
日本の大学教育の質が高かったため	1.15 *	1.14 *	1.17 **	1.15 *	1.16 **	1.19 *	1.18 *	1.19 *
日本でのアルバイト時間が長かったため	1.11 **	1.17 *	1.19 *	1.19 **	1.18 **	1.09 **	1.07 **	1.11 **
日本の文化に関心があったため	1.09	1.08	1.09	1.11	1.06	1.06	1.03	1.01
日本の大学の専門分野の研究レベルが高かったため	1.22	1.11	1.15	1.16	1.14	1.22	1.24	1.23
日本の大学卒業後にそこで就職したかったため	1.16	1.11	1.14	1.13	1.12	1.18	1.19	1.17
日本の大学に友人・親戚が留学していたため	1.03	1.01	1.02	1.01	1.03	1.01	1.04	1.02
日本の大学に関する情報が入手しやすかったため	1.02	1.01	1.01	1.03	1.02	1.01	1.02	1.01
日本の大学で留学生が多かったため	1.05	1.05	1.04	1.06	1.03	1.07	1.06	1.05
日本の大学卒業後に母国の関連企業で就職したかったため	1.01	1.01	1.02	1.02	1.01	1.08	1.08	1.09
日本への渡航費が安かったため	1.01	1.01	1.04	1.05	1.02	1.03	1.02	1.01
日本は安全性が高かったため	1.02	1.02	1.04	1.01	1.03	1.04	1.02	1.01
日本の大学での生活費が安かったため	0.89	0.77	0.69	0.81	0.84	0.86	0.81	0.82
日本に両親がいたため	0.77	0.55	0.67	0.59	0.66	0.77	0.68	0.66
日本で奨学金がもらえたため	0.69	0.22	0.24	0.44	0.21	0.66	0.69	0.55
<Pull/micro要因(国際的学習環境)>								
外国人留学生の割合が多かったため	1.33 **	1.33 **	1.21 **	1.19 *	1.13 *	1.17	1.15	1.14
外国人教員の割合が多かったため	1.29 **	1.29 **	1.19 *	1.16 **	1.12 *	1.15	1.13	1.13
日本人学生と外国人留学生の混在型宿舎が充実していたため	1.25 **	1.23 **	1.19 **	1.19 **	1.19 *	1.18	1.17	1.15
外国人留学生の学生支援体制が充実していたため	1.22 **	1.21 **	1.13 *	1.11 *	1.04 *	1.01	1.00	1.00
英語のみで卒業できるコースがあったため	1.19 **	1.17	1.14	1.09	1.03	1.19 *	1.18 **	1.14 **
英語による授業科目が多かったため	1.17 **	1.16	1.13	1.07	1.02	1.16 **	1.16 **	1.13 **
英語によるシラバスがあったため	1.17 **	1.16	1.11	1.03	1.01	1.15 *	1.15 **	1.11 **
<Pull/micro要因(入試広報)>								
広島大学説明会や相談会に参加したため	3.56 **	3.44 **	3.33 **	3.19 *	3.42 **	3.33 **	3.41 **	3.39 *
広島大学案内やパンフレットをみたため	1.21 **	1.19 **	1.16 *	1.15 **	1.14 *	1.19 *	1.17 **	1.15 **
広島大学のホームページをみたため	1.19 **	1.18 **	1.15 **	1.13 **	1.11 *	1.18 **	1.16 **	1.13 *
Nagelkerke決定係数	0.33	0.31	0.29	0.28	0.25	0.23	0.19	0.17
モデル適合度	**	**	**	**	**	**	**	**
N	652	122	87	65	31	132	159	56

**p<0.01, *p<0.05 (有意水準)

いては留学生に対するチューター制度が存在しており、より充実している様子が見られる。またDさんのように文系学部を志望している場合は、外国人教員・留学生の量的拡大や、国際的な大学設備・学生支援環境の質的充実が左右しているのに対して、Cさんのような理系学部を志望している場合については、英語による大学教育環境の質的拡大が影響を及ぼしていることが明らかとなった。そしていずれの語りからも、当初は広島大学を志望していたが、私費外国人留学生入試制度の定員枠が限定的で、試験の内

容が難しいため、断念したという課題があることも確認できた。

5.5 広島大学志望形成の規定要因

本節では、広島大学志望者(広島大学志望者=1, 広島大学以外志望者=0)を規定する要因について、ロジスティック回帰分析を行い、検証を行う。このロジスティック回帰分析の結果は表2に示している。

まず本人の社会・経済的状況についてであるが、全体では女性ダミー、中国出身ダミー及び、家庭の経

済状況が有意な影響を与えていることがわかった。また学部別では経済学部で女性ダミーが正の効果、工学部においては負の効果を及ぼしており、学部を通じて中国出身ダミー並びに、家庭の経済状況がそれぞれ有意な影響を及ぼしていることが明らかとなった。

次に渡日前の学習状況に関してであるが、高校の学業成績、日本語能力試験スコアが有意な影響を与えていることが確認された。また学部別では理学部及び、工学部において高校の学業成績が有意な影響を与えていた一方で、全学部を通じて、日本語能力試験スコアが有意な効果を及ぼしていたことがわかった。

また渡日前の渡航希望国・日本選択理由・志望大学の有無についてであるが、日本渡航希望ダミーが正の効果、志望大学決定ダミーが負の効果を与えていた。これを学部別にみても、同様の傾向がみられた。

そして Push 要因については母国の大学への進学競争が厳しく進学が難しかったため、母国の学校での先生や両親の勧めがあったため、母国の大学教育の質が低かったためで有意な影響が認められた。また Pull/macro 要因については日本が経済や技術が発達した国であったため、日本の大学教育の質が高かったため、日本でのアルバイト時間が長かったためで有意な影響を及ぼしていることが明らかとなった。これらすべてを学部別にみても、学部を通じて規定力は異なるものの、同様の傾向がみられることがわかった。

さらに本研究において着目している Pull/micro 要因（国際的・大学環境）に関しては、外国人留学生の割合が多かったため、外国人教員の割合が多かったためという「外国人教員・留学生の量的拡大」、日本人学生と外国人留学生の混在型宿舎が充実していたため、外国人留学生の学生支援体制が充実していたためといった「国際的な大学設備・学生支援環境の質的充実」がそれぞれ有意な影響を及ぼしていることが確認できた。これについては学部によって違いがみられ、経済学部、法学部、総合科学部、文学部という文系学部では「外国人教員・留学生の量的拡大」及び「国際的な大学設備・学生支援環境の質的充実」が有意な影響を与えていたのに対して、理学部、工学部、生物生産学部といった理系学部においては「英語による大学教育環境の質的拡大」がそれぞれ有意な影響を及ぼしていることが明らかとなった。このことから、本研究で示した仮説 1 が支持されたとと言える。

最後に Pull/micro 要因（入試広報）としては、広島大学説明会や相談会に参加したためといった「直

接型入試広報」、広島大学案内やパンフレットをみたため、広島大学のホームページをみたためという「間接型入試広報」がそれぞれ有意な影響を与えていたことが明らかとなった。これを学部別にみても、すべての学部を通じて、「直接型入試広報」「間接型入試広報」が有意な作用を及ぼしていたことが確認された。ただしいずれの場合についてもそのオッズ比の値に着目すると、すべてにおいて直接型入試広報のオッズ比の方が高いことがわかる。よって、「直接型入試広報」「間接型入試広報」の両者が有意な影響を与えてはいるものの、より「直接型入試広報」の及ぼす影響が強いと言え、本研究で提示した仮説 2 が支持された。

6 結論

本研究では、日本語学校外国人留学生の広島大学への志望形成を規定している要因について、アンケート調査及び、インタビュー調査から検証を試みた。

分析結果から、文系学部では「外国人教員・留学生の量的拡大」「国際的な大学設備・学生支援環境の質的充実」が、理系学部においては「英語による大学教育環境の質的拡大」の効果がそれぞれ明らかとなった。またいずれの学部においても、「直接型入試広報」「間接型入試広報」の効果が確認された。そしてそれら両者のオッズ比の値に注目すると、すべてにおいて、より「直接型入試広報」の与える影響が大きかった。

日本語学校から広島大学への志望者を獲得する上で、全学において国際化を推進することは望ましいことである。特に文系学部において多くの外国人留学生を獲得するに当たっては、その大学の教育・研究レベルの高さが求められることは言うまでもないが、それらに付随する「来日前」「来日中」における体系的で盤石なサポート整備が重要である。具体的に「来日前」については、日本語以外の多言語 Web サイトの充実、留学生獲得を目的とした奨学金の設立などが必要であり、「来日中」は、宿舎の確保、総合的なサポート、Web サイトの開設（日本語学習、保健・医療、子育て、奨学金、ビザなど）が重要である。その一方で、とりわけ理系学部では、英語でのコースや授業を増やすため、新規に大学教員を採用する面接のときに、事前に英語でシラバスを提出してもらい、英語で模擬授業を行うといった工夫も必要であると考えられる。

注

- 1) 世界トップレベルの大学との交流・連携を実現，加速するための新たな取り組みや，人事・教務システムの改革，学生のグローバル対応力育成のための体制強化など，国際化を徹底して進める大学を重点支援する事業である。(https://tgu.mext.go.jp/)
- 2) 外国人留学生とは，出入国管理及び難民認定法によると，大学（大学院を含む），短期大学，高等専門学校，専修学校（専門課程），大学に入学するための準備教育課程を設置する教育施設及び日本語教育機関において教育を受けるもののことを指す。
- 3) 2019年度の広島大学12学部の私費外国人留学生入試における入学志願者数は62名（前期：20名，後期：42名）。
- 4) 本研究の対象である広島大学では，2023年までに外国人専任教員等の数を901名（全教員の約53%）とすることを目標としている（https://tgu.mext.go.jp/universities/hiroshima-u/index.html）。そして池ノ上学生宿舎という日本人学生と外国人留学生が住むことができる学内寮を拡張し，外国人留学生の定員を増やすことに加え，外国人留学生のために日本語ライティング相談（https://www.hiroshima-u.ac.jp/wre/tutoring）などの学生支援体制を整えている。
- 5) 広島大学志望者は321名，広島大学以外志望者は331名。広島大学志望者を学部別にみると，理学部（81名），工学部（73名），経済学部（51名），法学部（49名），総合科学部（39名），文学部（18名），生物生産学部（10名）。広島大学志望者の出身国・地域は，中国（292名），台湾（9名），ベトナム（8名），ネパール（6名），韓国（6名）。
- 6) 加藤・陳（2002）によれば，最も一人あたりのGDPが高いのは上海（46,718元）であるが，最も低いのは貴州（3,603元）で，中国省間GDP格差が激しいことがわかる。
- 7) アメリカでは週28時間キャンパス内でアルバイト可能であり，イギリスでは週20時間となっている（岡，2004）。
- 8) SGUの国際化関連指標に基づき作成した。
- 9) 横田（2013）に基づき入試広報効果の項目を作成した。

参考文献

- 浅野慎一（1997）．『日本で学ぶアジア系外国人—研修生・留学生・就学生の生活と文化変容』大学教育出版．
- 久村研（2002）．「多文化教育環境におけるカリキュラムの研究—日本語学校就学生に対する進路希望調査を中心として」『田園調布大学紀要』34, 111-133.
- 加藤弘之・陳光輝（2002）．『中国—東アジア長期経済統計12』勁草書房．
- Lulat, M. & Altbach, G. (1985) . "International students in comparative: Toward a political economy of international study", *Higher Education Handbook of*

Theory and Research, 1, 439-449.

- 中澤渉・藤原翔（2015）．『格差社会の中の高校生：家族・学校・進路選択』勁草書房．
- 岡益巳（2004）．「留学生の資格外活動許可基準の歴史的変遷とその諸問題」『留学生教育』9, 19-33.
- 岡益巳・深田博己（1995）『中国人留学生と日本』白帝社．
- 張梅（2012a）．「私費留学生の進学意識と進路決定」『東京大学大学院教育学研究科紀要』52, 169-181.
- 張梅（2012b）．「中国人私費留学生の日本における大学進学—国境を超える大学への移行ルートに着目して」『留学生教育』17, 29-37.
- 山田陽子（2010）．『中国人就学生と中国帰国子女—中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』風媒社．
- 横田雅弘（2013）．「留学生獲得のための入試広報戦略—オーラジャパンと個々の大学の戦略」『留学交流』33, 1-10.